

## 私にとっての宗教研究と文化人類学

長谷, 千代子

九州大学大学院比較社会文化研究院 : 講師 : 文化人類学、宗教研究

<https://hdl.handle.net/2324/18968>

---

出版情報 : 2009-11  
バージョン :  
権利関係 :

私にとっての宗教研究と文化人類学  
2009年度宗教研究所賞授賞式スピーチ  
長谷千代子

ご紹介いただきました、長谷と申します。この度は、私の著作を国際宗教研究所賞に選んでいただきまして、大変光栄に思っております。関係者の方々に深く感謝いたします。

受賞のお知らせをいただいたのは、三週間ほどまえだったのですが、その手紙に、「受賞スピーチを15分間お願いします」と書いてありまして、正直なところ、少々困惑いたしました。最近はやアカデミー賞の女優さんでも、控えめに一言二言で切り上げるのに、いくらこの素晴らしい賞をいただいたからといって、私のようなものが15分も話すのは恐れ多い気がしました。そこで「いったい何をお話すればいいのでしょうか」と事務局にお伺いしたところ、「本の内容の紹介や、研究の苦労話をからめて、自己紹介のような感じでお願いします」とのことでした。そんなわけで、そういう内容で、申し訳ありませんがお付き合いください。また、今日は専門家だけでなく一般の方も居られるとうかがいましたので、どちらかというところそういう方々に向けてお話しさせていただきます。

まず、私の本の内容は、中国の宗教状況を、雲南省の徳宏というところに住んでいるタイ族の事例をとおして研究したものです。1997年に初めて調査に行ったとき、私はごく単純に、俗に言われている文化人類学という学問の定石どおり、日本人である私が徳宏のタイ族という異文化を研究するつもりでございました。

ところが、いざ現地に行ってみますと、徳宏タイ族の文化に触れる前に、思いがけない形でカルチャーショックを受けることになりました。それは、まだ私が徳宏タイ語をまったく喋れないとき、中国語の通訳を介してあるお寺でインタビューしていたときのことです。お寺の由来を聞いているうちに、タイ族の老人たちが、かつてそこに駐留していた日本軍のことを話し始めました。徳宏というところは、ビルマ国境に接しておりまして、1942年にビルマから中国に侵入してきた日本軍によって、短期間ではありますが一部占領されていたことがあるのです。私はその話を詳しく聞きたかったのですが、現地語が分かりませんでしたので、通訳と老人たちの会話が終わってから内容を聞こうとしました。ところがその通訳は、「あなたが研究したいのは風俗習慣や宗教でしょうか？政治や歴史は関係ないです」といって、何も教えてくれませんでした。宗教や風俗習慣と、政治や歴史は無関係だと言わんばかりの彼女の答えに、私は啞然としてしまいました。

しかし、実をいうとそのとき同時に、これは案外異文化体験とまではいえなくてもかもしれないということも感じていました。なぜかというところ、それをきっかけに、それと同じような、日本でのある出来事を思い出したからです。それは私が小学生の頃のことです。私は教室に張ってある時間割表を見つめていて、不思議な気分になったのです。皆さんもご存知のとおり、時間割表は、横は列ごとに月火水と曜日が並んでいて、縦は行ごとに1時間目、2時間目、ときれいに整理されています。私がそのとき見ていた時間割表はさらに丁寧に、国語は黄色、算数は青というふうに升目ごとに色分けされていました。なかでも特に私の目を引いたのは、

紫色に塗られた「道徳」の時間でした。

私にとって、この「道徳」の時間というのは、非常に奇妙なものでした。たしか水曜の4限目あたりだったと思うのですが、もしその時間が「道徳」の時間だというのは、それ以外は、不道徳の時間でもいいんでしょうか、道徳ってパートタイムでそのときだけ勉強するようなものなんだろうか、と思ったわけです。そう考えると、今度は「国語」の時間も奇妙なものに思えてきます。算数でも理科でも、国語以外の言葉で習ったことはないのに、私たちが国語を勉強したのは「国語」の時間だけのように、時間割には書かれています。そんなことを考えながら時間割を見ていると、だんだんそのきれいな直線がグニャグニャしてきて、「道徳」の紫色や「国語」の黄色がじわーっとまわりに染み出していくという、そんな気分になったことを、思い出したわけです。

つまり、どこからどこまでが政治で、どこからが歴史で、どこまでが宗教か、道徳か、といったことは、人が勝手に決めているのであって、その決め方が恣意的かつ政治的であるのは、中国でも日本でも同じことなのです。ただ、その分ける基準とか、部分とか、局面とか、あるいは厳格に分けないと気がすまないか、それともだいたいでもいいのか、といったことが違うわけです。

私が著書の中で描いたのは、中国では一般的になにが「民族文化」でなにが「宗教」でなにが「迷信」でなにが「風俗習慣」と考えられているかということ、そしてその政治的な文化の分け方が、徳宏タイ族の実際の日常生活感覚といかになぜれているか、ということでした。私は徳宏での研究を通じて、こうした問題にはっきりと気づかされつつ、そっくりそのまま同じ問いを、日本の文化や宗教についても考えてみたいと思うようになりました。著書では日本のことにはまったく触れておりませんが、今後も研究を続けていくことができるならば、徳宏での調査も継続しつつ、現在の日本についても、調べていきたいと思っています。

次に、私が取り組んでいる文化人類学という学問についてお話します。先ほど述べましたように、言葉と現実との間に或る違和感を抱えてきた私にとって、文化人類学という学問は非常に有効な研究手法や視点を与えてくれるものであったように思います。

私が文化人類学という学問の存在を知ったのは、大学に入ってからでした。それまで私はこの学問についてまったく無知でした。たとえばエドモンド・リーチの *Rethinking Anthropology*、日本語では『人類学再考』という有名な本があるのですが、私は教養部の講義でその題名を初めて聞いて、「人類学って最高だネ！」という軽いノリの参考書かな、と思ったくらいでした。しかし実際にかじってみると、文化人類学は、世界を分野ごとに分断しようとする時間割のような発想を打ち破ってくれる学問であり、私の子供のころの直観に確信を与えてくれるものでした。

文化人類学の教えによれば、ある社会について知りたいときには、宗教だけとか、政治だけ、歴史だけというふうに一部分だけを切り取って研究してはいけなさとされています。それらは互いに影響しあい、関連しあって存在していて、もともと切れ目などないのだから、それらを全体的総合的に見なければなりません。さらに大事なことは、相手と自分、もしくは相手の社会と自分の社会を切り離し

て考えてもいけません。相手と自分は互いを鏡のように映しあい、影響しあう存在であり、別々に切り離して考えることはできません。私は中国の人々が宗教と政治と歴史などを峻別しようとするのに驚かされましたが、逆に中国人から見れば、そんな当たり前のことに驚く私に驚くに違いないのです。

このことについて、私の恩師である竹沢尚一郎先生は、「文化人類学とは野蛮な学問である」というふうに表現されたことがあります。普通、学問も含めて多くのものは、文明が発達するほど専門分化し、洗練されていくものですが、文化人類学は無謀にもそれに逆らって、全体性や総合性を目指すから野蛮だというのです。実際には人間の能力には限りがありますので、政治も経済も宗教もすべてを把握するなどということにはできないと思います。少なくとも私には無理ですので、その点では文化人類学という学問を選んだのは、身の程を知らなすぎたと反省しております。しかし、その一方で、時間割のように窮屈で、融通の利かない、息苦しい世界観というものに違和感を持ってしまった以上、すべては分ち難く関連しているという視点にどうしても共感せざるをえないのです。

その意味で私は、文化人類学が得意だからやっているのではなく、必要に迫られて仕方なくやっています。時間割の世界観から抜け出すには、どんなに難しくてもその方向に行くしかないからです。言ってみれば、私はベスビオス火山の噴火に気づいて逃げ出すポンペイの市民のようなものです。逃げ切れるとは思いませんけれども、自分が走っている方向については一応納得しているので、あんまり恨めしそうな死に顔をせず済むのではないかと思って、そこに救いを見出しております。

最後に、私が研究対象としている「宗教」について、私の考えを簡単に述べさせていただきます。今回の受賞作は『文化の政治と生活の詩学』というタイトルでして、「宗教」という言葉は入っておりません。私はなんとかしてタイトルに「宗教」という言葉を入れようとしたのですが、どうしてもうまく行きませんでした。諦めざるをえませんでした。なぜそうなったかという、「宗教」という言葉が、「国語」とか「道徳」というのと同じように、私の嫌いな時間割の言葉になってしまっているからです。私が「宗教」という言葉を通してイメージするものは、たとえば「別に信者じゃないけど結婚式は教会で挙げたい」とか、「人生は自己責任だけど自殺だけはだめ」とか、そういう発想や問題意識をも含みます。つまり、特定の宗教教団の枠を超えてあらゆる人がごく日常的に生活の中で直面している宗教的な問題全般です。ところが、それを私が「宗教」という言葉でまとめた途端、多くの人が、「じゃあ専門は何教ですか」とか「何族の宗教ですか」とか、ひどいときは「どんな悪いカルトを見張っているんですか」という具合に、時間割の発想で、私に切りかかってくるのです。

そういうわけで、私はタイトルに「宗教」という誤解されやすい言葉を入れるのを諦めて、あとがきのところに「宗教および宗教的なものへの関心が、本書の陰の主題である」という一文を添えさせていただきました。今回、国際宗教研究所のみなさまが、文才つたない私の心を汲んで、この著書が「宗教」について書いていることを読み取って下さったことに、重ねて深く感謝いたします。

このように、宗教および宗教的なものというのは、捉え難いものではありません

が、同時に非常に興味深いものです。これについて私は最近、「宗教とは鶏肋である」というエピグラムを思いつきました。「鶏肋」というのは鶏のアバラと書きまして、三国志に出てくる魏の英雄曹操の言葉です。ある戦場で戦いが長引いたとき、曹操が「鶏肋をしゃぶるような戦だ」という感慨を持ったという故事に由来します。鶏の肋骨は味があっておいしいけれども、実際に食べられる部分は少ない、つまり割に合わない戦いだと悟って、間もなく撤退したという話です。

私は、戦の判断については曹操が正しいと思いますが、彼の鶏肋の食べ方は、あまり正しくないと思います。鶏肋そのものを食べるのではなく、他にいろいろな野菜を入れて、スープのダシとして使えば、とてもおいしいお鍋になったのではないのでしょうか。

最近では、即戦力で役に立つということがあらゆる方面で求められますから、下準備が不要ですぐエネルギーになるバナナのような食材が理想的なのかもしれません。しかし、それは「食材」というものを「たんに栄養になるもの」としてしか捉えない見方にもとづく判断です。そんな基準で鶏肋とバナナを比べるのは不公平です。あらゆるものは、その短所ではなく長所において評価されるべきだと思います。鶏肋がそのよさを最大限に発揮するのは、他の食材と結びつくときです。それそのものだけでおいしいというよりは、周りのものをおいしくする食材なのです。同様に宗教も、本棚などにしまわれている状態ではなく、日常生活の中にとけこんで生きられている状態のときに、もっともよく味が出るのだと思うし、その相互連関的な状態を包括的に味わいたいというのが、ちょっと大きすぎる野望ではありますが、私の願いです。

このことに関連して、私のもう一人の恩師である関一敏先生は、「宗教学は、役に立つわけではないが、ためになる学問なのだ」ということをいつも学生に言うておられます。私はこの言葉を、「宗教も宗教学も、それそのものだけを食べてもあまり身にはならないが、日常生活というお鍋のためには有益なものなのだ」というふうに理解しております。そうはいつても、私のように宗教研究で食べて行こうとするのは、まさに鶏肋のスープだけをすすって生きようとするようなものであり、高学歴ワーキングプアの貧しい食卓を髣髴とさせてしまったかもしれません。しかし、一般の皆様方には、宗教や宗教学のおいしいところを取り入れて、豊かな食生活を送っていただければ、これに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、受賞作の出版元である風響社の石井さんに、特に感謝をささげたいと思います。私の書いたものは、当初「鶏肋のようにつまらないものだ」と見なされて、出版助成を受けることができませんでした。石井さんのご理解とご尽力がなければ、この本はこの世に存在しませんでした。

そろそろお鍋のおいしい季節ですので、お鍋におダシは大切だということをお説いたしまして、感謝のスピーチに代えたいと思います。長い間お付き合いいただき、どうもありがとうございました。

2009年11月 大正大学にて